

# コレクシヨン調査

村山隆雄

一、三木文庫

二、凌霄文庫

## 一、三木文庫

徳島市から、阿波の金蔵といわれた四国三郎、吉野川を渡り、車に乗ること二〇分、徳島県板野郡松茂町中喜来に三木文庫がある。三木文庫は、三木産業株式会社社長、三木家第一三世与吉郎氏の所蔵する文庫で、三木家は、播州三木の城主別所長治が、天正八年(一五八〇)に滅亡ののち、その一族であった規治がこの地に居を定め、第二世吉太夫高治が延宝二年(一六七五)に藍玉の取扱いを始めて以来、明治の中頃、印度藍そして人造藍(インジゴ)によって阿波藍が市場から駆逐されるまで、関東売りの藍師として重きをなした家柄である。そして藍で財を成した富豪

が、激動の時代に次々と姿を消していった中で、近代産業への転換に成功した数少ない例でもある。

昭和四三年に完成した本館は(公開は翌四四年四月一日より)鉄筋コンクリート造二階建て、一五〇人収容の一般閲覧室と研究者のための研究室を有する大規模な建築である。一階には藍関係諸用具、藍染布類、天然色料と染布類、藍栽培・藍玉製造過程の図版およびその諸用具、三木文庫刊行の図書(すでに二三点が刊行されている)が展示され、居ながらにして藍の栽培から藍玉製造の過程の概略と我が国における藍染の変遷を知ることができる。二階には、

阿波藍関係史料 一、八〇〇点

一般庶民史料 一二、〇〇〇点

一般図書 和装 五、二〇〇点

洋装 九、九〇〇点

版画地図番附 二〇〇点

書跡絵画 六〇〇点

拓本類 二五〇点

および我が国に植生する染料植物一七三種、繊維植物二一種の標本を収蔵している。染料植物については、すではほとんど網羅できたとのことである。

別館は、同じ敷地内に袴布館と和三盆館があり、前者には織機類一〇〇点、樹皮、草皮繊維の織布類三〇点、後者には、和三盆製糖用具六〇点、農器具類七〇点が展示されている。

史料は、大阪・凌霄文庫主で、三木文庫主任である後藤捷一氏らの尽力により非常によく整理され、今日に至っている。史料目録としては「三木文庫所蔵庶民史料目録」第一輯（阿波藍関係史料）、同第二輯（一般庶民史料）があり、現在一般図書についても、その目録を作成中である。

### —— 藍関係史料 ——

藍栽培、藍玉製造および藍玉の取引きにおける大福帳類はもとより、第一一世与吉郎順治の手になる「藍の栽培及製法」第一稿、第二稿（明治二〇年）「阿波藍譜」栽培製造篇に収録、「朝陽館藍売捌の件に就ての来信」「明治十

一年寅年十月朝陽館五代江取組、条約草稿」といった五代友厚関係文書（「阿波藍譜」精藍事業篇に、解題とともに収録）などがある。そしてまた、印度藍としてインジゴの合成は、染料の本命といわれた阿波藍を圧迫し始めるが、当時の阿波藍専売派と外藍併売派の激しい抗争を裏づける史料、「阿州産藍之説」（安岡百樹著明治五年成立、謄写印刷版 三木文庫では、一般図書扱いになっている）、そして藍師三木を支え、今日の繁栄を生み出す基盤のひとつとなった女無用の江戸店の服務規律である「江戸店式法」（この最も古い式法は、寛政一二年で、その後訂正されたり追加されたりしており、「阿波藍譜」史話図説篇に、その全文が収録されている）等々もある。

藍関係史料は、A00藍・総記一般から、A90その他雑までの四四の項目に分類され、それぞれ分類記号、年代記号（西暦一六〇〇年から現代までを、AからEまでの五つに分け、年代不記のものについては、Fが付されている）、受入順番号が記入され、整理されている。史料目録第一輯は、阿波藍関係の史料目録であるが、分類表は、この標目を踏襲しており、分類、配列は同じである。

たとえば、

A	10
C	5

のラベルが貼られている史料は、一八三一年二月から、一八七〇年三月の間の史料で、葉藍床入（床賃借）に関するものである。因みに床入と

は、葉藍を発酵させて薬<sup>すく</sup>と呼ばれる染料を製造する作業場  
——寝床——に入れることである。発酵させて薬とする際  
には、適度に水を加える必要があり、水運びは、水師と呼  
ばれる専門家によって指図された。できあがった薬は、す  
でに完全な染料であるが、これを藍白で搗き固めたもの  
が、藍玉である。この藍玉には、藍砂と呼ばれる細砂が増  
量剤として加えられ、しばしばトラブルを起こした。そし  
て、明治二〇年に藍砂の混用は禁止された。

ここで分類表に沿って史料群を列挙すると、仲間・組  
合・公儀、藍検査、藍玉俵懸銀、藍玉染染漬、諸引合書  
類、絵符帳、送り状、判取帳、葉藍買入、葉藍床入、水  
運、藍搗、藍玉買入、藍砂、藍玉貫目帳、水揚帳、藍玉相  
場、藍玉仕切通、藍玉切手帳、藍玉出見帳、藍玉揚置帳、  
藍玉元附帳、藍玉仮改帳、藍玉売場印分帳、川船運賃、藍  
玉積出、藍禿帳、売場勘定帳（阿波藍）、藍靛売場勘定帳  
（印度藍）、店卸帳、国元勘定帳、売場出荷取立金を登帳、  
国元仕入下銀差引帳、売場金銀請取帳である。

### ——一般庶民史料——

三木家は藍玉問屋であり、また、庄屋、大庄屋でもあつ  
た。そして小高取りとして藩財政（蜂須賀家）に關与して  
おり、法令、触書をはじめ、検地、貢租、課役、戸口、凶  
災関係の史料や、地図、絵画および藍玉問屋としての三木

家の当時の地位を知ることができる番附や、藍の品質、声  
価の番附、長者番附などの番附類等々、多数の庶民史料が  
保存されている。

史料は、史料目録第二輯の標目に沿って、000の法令一般  
から、990の三木文庫関係に分類され、整理されている。な  
お大福帳類は、分類番号の後に、・を付して別置されてい  
る。

### (1)瓦版

すでに「日本文庫めぐり」（出版ニュース社）で紹介さ  
れたが、江戸末期の瓦版およびそれに添付された書簡も貴  
重なものである。「石清水行幸奉記」文久三年四月（一八  
六三）。松代、川中島そして北陸の惨状がうかがえる「信  
濃国大地震詳図入説明書」弘化四年三月（一八四七）。「諸  
国大坂大地震大津波末断」嘉永七年一月（一八五四）、  
「東海道大坂辺大地震津波図」嘉永七年一月（一八五  
四）。これらは、「寅十月八日、大地震ゆり通しの中へ、湊口  
沖手より」で始まり、大津波の惨状を伝えている。「大坂諸  
国大地震大津波並出火」安政二年三月（一八五五）。嘉永七  
年聞書、諸国大地震並出火とあり、奈良、伊賀、紀州、郡  
山、南大和、四日市、遠く福井の惨状も見える。西暦一八  
五四年前後には、かなり大きな地震が続いて起り、その被  
害は相当広範囲にわたったことを、これらの瓦版から知  
ることができる。この他にも「京都大火畧図」年号不記

〔寅四月六日九ツ時出火、遠方へ志らせのため〕とあり、延焼地域を市街凶に朱で示している。〕や、幕末から維新への世情を伝える「御触書文字」(安政元正月、浦賀沖へ異国船渡来について)等の黒船関係や、会津落城の記事もある。

### (2) 議会関係史料

第一一世、第二二世は、貴族院議員であり(第二二世は、衆議院議員も経験)、また第一三世は、つい先頃まで参議院議員をつとめられた。このため三木文庫には、多数の議会関係史料が保存されている。第一一世は、勝海舟と交流があったといわれ、帝国議会開設当初の貴族院議員として、貴重な報告をしている。三代に亘る議会活動は、我が国の議会の歴史であるともいえよう。

### (3) 錦絵

第八世与吉郎の観音信仰は、第九世に受け継がれ、浅草寺から聖観音の開眼章をうけ、中喜来に観音堂を建立した。この観音信仰により、三木家には浅草寺関係の錦絵が保存され、震災、戦災を経ない往時の浅草をしのぶことができる。

## 一般図書

自然科学、産業、医学関係から古いところを、三木文庫刊行予定の一般図書目録の草稿に沿って列挙する。写本と

ことわりのないものは、すべて刊本である。「算法通書」

三冊、嘉永七年(一八五四)、古谷定吉著、山崎屋清七発

行。「算法点竄指南」三冊、文化七年(一八一〇)、大原勝

右衛門著、須原屋茂兵衛発行。「量距尺並表 量距尺運用

発微」折帖二冊、嘉永七年(一八五四)、江沢述明著、山

城屋佐兵衛発行。「氣候懸断録」六冊、天保二年(一八

四)、嘉永六年(一八五三)、安政元年(一八五四)、安

政三年(一八五六)、安政四年(一八五七)、安政七年(一

八六〇)、菅原正義著、著者発行。「松翁道話」七冊、文化

十一年(一八一四)、布施伊右衛門著、大阪文海堂発行。

「医道重宝記」一七二丁、安永九年(一七八〇)、本郷正豊

著、柏原屋清右衛門発行。「益軒先生菜譜」九〇丁、写本、

正徳四年(一七二四)成立、貝原篤信著。「千金翼方」一

五冊、明和七年(一七七〇)、湯浅兼道校訂加點、阿波

幽松軒蔵版。「脉論口訣」卷二、卷五、二四丁、天和三年

(一六八三)、梅村弥右衛門発行。「量地指南」前編、三冊、

享保一八年(一七三三)、村井昌弘著、野田弥兵衛発行。

「量地指南」後編、五冊、寛政六年(一七九四)、著者、発

行者は前編に同じ。「数寄屋工法雛形」三冊、貞享三年(一

六八六)、伊藤景治著、発行者不記。「珍術万宝全書」六

冊、明和元年(一七六四)、須原屋茂兵衛発行。「日本航路

再見記」一〇六丁、嘉永四年(一八五二)、河内屋喜兵衛

発行。

史料はNDCにより分類され、整理されている。このように三木文庫は、いわゆる文庫というより民俗史料館あるいは博物館に近い存在であり、近世経済史をはじめとする種々の研究に、その貴重な史料を提供している。

## 二、凌霄文庫

凌霄文庫は、大阪市にある。この文庫の名前は、文庫主後藤捷一氏の邸内の建物をとおっていた凌霄（のうぜんかずら）に由来するという。後藤氏は、前述三木文庫主任をはじめ、地方史研究協議会評議員、日本伝承染織振興会評議員等の役職にあり、八五才とは思えぬ若さで、今なお研究と著述にいそしんでおられる。氏の著述については、昭和四四年、四六年に、後藤捷一先生祝寿記念会から「後藤捷一大人著述目録」が刊行された。氏は、元来染色技術者であるが、染織や音楽の担当として、教壇に立たれたこともある。若い頃には、渋沢栄一の恩顧を受け、白井光太郎博士とも交流があったという。

氏は非常な博学であり、専門の染色関係は無論のこと、郷土史、民俗学、和歌、音楽に造詣が深く、蔵書の構成も多方面にわたっているが、染色、阿波史関係が、その中核をなしている。中でも、染色文献のこのような架蔵は他に例がなく、一大宝庫となっている。

## 染色関係史料

古来染色技術は秘伝的要素が強く、甚だしい場合、妻子にすらその秘密を明かさなかつたといわれる。特許のない時代であるから、染屋は秘密を守ること懸命であった。また逆に、その秘伝を伝授することを専らとする者もあったという。それだけに染屋自身の手記などは、実に貴重なものである。後藤氏の命名による「紺屋仁三次覚書」（写本）は、この染屋の手記である。表紙には「他見無用西照寺村紺屋仁三次」とあって題号はない。奥書には「天明四年閏正月十五日西照寺村紺屋仁三次」とある。このような状況のためか、専門書としての染物書が刊行されたのは、余り古いことではない。「紺屋茶染口伝書」（寛文六年）は、この種のものとしては江戸時代最初の単行本であり、この書から後藤氏は、楊梅皮（桃皮）が染種として、当時占めていた位置の重要性を指摘しておられる。凌霄文庫所蔵の「紺屋茶染口伝書」は、京都 絵筆屋勘右衛門板の写本である。以下、今回拝見した史料を列挙する。

●「聞書秘伝抄」内題「万聞書秘伝」一冊、奥書に「慶安四年（一六五一）正月吉日」とある。本書の成立は古く、応永二年（一三九五）といわれ、異板も多く、慶安五年板「万聞書秘伝」や「聞書秘伝抄」承応元年（一六五二）京都 西村又左衛門板等数種の「万聞書秘伝」を所蔵してい

る。

●「式内染鑑」 徳川吉宗が、享保一四年（一七二九）から吹上御苑に染殿を設け、浦上直方、後藤縫殿らに命じ、延喜の古式を按じて、帛草を染め出させた際、染色した実物を集めて一帖としたものである（後藤捷一著「古書に見る近世日本の染織」所載、解題より）。文庫には、徳大寺家の蔵書印のある「式内染鑑」とその異名本である「黄摺染考」「縫殿式染」の三種の「式内染鑑」（三書いずれも写本）がある。

●「色染物之口伝」 写本、表紙に「嘉永二年（一八四九）西三月 吉日 福井氏」とある。

●「老農茶話」 全 刊本、文化元年甲子（一八〇四）。のちに「勸農叢書 老農茶話」としてその全文が収録された。これは織維にもふれている。

●「出藍直秘伝」 写本、染屋物兵衛編、天保一四年（一八四三）、建てそんじ直しの秘伝を書いたもので、図（青色）がある。

●「機織彙編」 野州黒羽藩主大関増業の著述である。板本は、五巻よりなり文政一二年（一八二九）二月附北村季文の序と文政九年（一八二六）二月の自跋とがある。稿本は増業の大著「止戈柞要」（文政三年）一六六巻本の一二七巻から一四一巻に相当し、板本「機織彙編」の母本である。内容も板本に比してち密であり、紡車や織機等の詳細

な図版が多数収録されている。

●「桑茶蚕機織図会」 二冊、刊本、梅殿通文編、「機織彙編」の改題本であり、自序に「明治と御代あらたまりたる年長月のはじめ」とある。

●「彩色類聚」 上下二巻本、写本、文化一四年（一八一七）、前述「止戈柞要」の一四五、一四六巻に相当し、染料植物の彩色図が美しい。

●「毛氈製方」 一冊、写本、文政三年（一八一〇）。江戸時代唯一の毛氈（フェルト）製法に関する技術書であり、前述「止戈柞要」には、器械做方中に毛氈製作法として収められている。文庫の「毛氈製方」には、増業の書き入れがあり、その稿本と見ることができると、後藤氏は指摘しておられる。結局このフェルト製造は、肝心の細羊の飼育が不成功に終り、頓挫したという。

●「御染物聞書日記」 一冊、写本、表紙に「元禄元年辰之三月吉日 佐藤平弥」とあって花押があり、見返には「此本者 信州上田領上塩尻村 信政」とあって花押がある。

●「染物種々藍出方伝法書」 一冊、写本、奥書に「十日町紺屋直治郎より聞書 増田安太郎主」とある。

●「当世染物鑑」 一冊、刊本、元禄九年（一六九六）、野田屋利兵衛刊行。

●「諸色染手鑑」 一冊、刊本、安永五年（一七七六）、京都書林吉田九郎右衛門外二名が刊行している。公刊した書

籍に染布を添附した江戸時代としては珍らしいもので、茶染系統がよくそろっている。

●「手鑑模様節用」一冊、刊本、梅丸友禪編、蜀山人序、自序。京都梅丸みせ本。着物の模様集で、「新古染色考説附色譜」があり、化政期に行われた色名について知ることが出来る。

●「居家必要」半紙判二〇冊、刊本、中国。成立は元時代といわれるが、編者は未詳。内題に「居家必要事類全集」とあり、居家に関するあらゆる事項を収録している。第一四巻染作類・洗練の項中に、染色の技法についての記載がある。

●「万国宝家 日本居家秘用」六冊、刊本、元文二年（一七三七）、三宅建治著。前述「居家必要」の模倣で、第四巻に染色の項がある。また紅染や萌黄染、桑染の項もある。

●「諸芸小鏡」六冊、刊本、貞享三年（一六八六）弾松軒撰。六冊目に万染物之部があり、「古事類苑」に引用されているが、真の出典は、「万間書秘伝」であると、後藤氏は指摘しておられる。

明治期の藍に関する文献として次の三書の紹介を受けた。  
●「染工秘伝書」写本、明治十九年、秋田定平著。藍作の法より始まり、藍床の図や道具、藍出の図がある。

●「阿波産藍之説」一冊、写本、安岡百樹著。「阿州産藍之説」（秋田県立図書館蔵）の改題本である。

●「阿波国藍業畧誌」一冊、写本、徳島県第一部農商課員であった椎野宇資の著述であり、明治期の阿波の藍業の概説および通史として優れたものといわれている。「阿波産藍之説」および「阿波国藍業畧誌」は、「阿波藍譜」栽培製造編にその全文が翻刻され、解題がある。

更紗関係の史料については、昭和四五年にはくおう社より「佐羅紗便覧」が刊行され、「佐羅紗便覧」「増補華布便覧」「更紗図譜」の解題がなされたとのことであるが、当館にその所蔵がなく、残念ながら参考にすることができなかった。しかしながら後藤氏は、すでに昭和一六年に大阪史談会より、郷土史談第三篇として「稲葉通龍と其著書」を刊行され、この中で「更紗図譜」を取り上げておられるし、島屋政一編「皇紀二千六百年記念印刷美術大観」（昭和一五年 大阪出版社）は、後藤氏の「更紗図譜」の諸本とその著者Vを収録している。その他「染料植物譜」（後藤捷一・山川隆平著）、「古書に見る近世日本の染織」の諸本と、今回うかがった話をもとに「佐羅紗便覧」の変遷を簡単に述べてみよう。

「佐羅紗便覧」（美濃判全一卷、刊本、安永七年、蓬萊山人著）は、我が国更紗染色に関する書中最古のものである。安永一〇年（一七八一）に、江戸の更紗師久須美孫左衛門によって「増補華布便覧」が刊行されるが、内容は、「佐羅紗便覧」に漏れた更紗と記事だけとから成っている。

る。天明四年（一七八四）にも「増補華布便覧」が出されるが、前述の二書を合冊したものであり、「佐羅紗便覧」の真の増補版といふことができる。天明四年版「増補華布便覧」を稲葉通龍が補正、天明五年刊行されたのが「更紗図譜」である。この「更紗図譜」は、異名を「新渡更紗雜形」といい、初板刊行以来一〇度近く板を重ね、昭和の初めまで売れたとのことである。文庫はこれら更紗関係一〇数種の板本を所蔵しており、「佐羅紗便覧」の変遷をまのあたりに見ることができぬ。

更紗の文献についての解題は、前述したもののほかに、島屋政一編「近世印刷文化史考」（昭和一三年 大阪出版社）所載の後藤氏著「更紗便覧考」および「江戸時代染色技術に関する文献解題」（後藤捷一著 昭和一五年 日本植物染研究所発行）があるが、触目することができなかった。

凌霄文庫の染色文献所蔵目録としては、「郷土史談 第六編 飯尾常房考」に「明治以前に於ける染色技術に関する文献」が、「古書に見る近世日本の染織」に「染料・染色に関する文献目録」が、そして「日本染織譜」（昭和三九年東峰出版）の「凌霄文庫篇」がある。

### 阿波史関係史料

凌霄文庫の郷土史料は、その大部分後藤氏が収集された

ものであるが、氏の生家がかつては藍商で、かつ与頭庄屋を勤めており、これに関連した諸記録と氏の祖父尚豊氏が明治の初期に、藩の風土記編集にたずさわっておられた当時収集されたものもある。しかし、名東郡関係の史料は、残念ながらかなり散逸してしまっている。

所蔵目録としては、「徳島県庶民史料所在目録」第二輯（昭和三一年 阿波研究叢書刊行会）および「古書に見る近世日本の染織」所載の「凌霄文庫の郷土文献」があるが、未整理のものについては、記載されていない。

●「阿淡年表秘録」 美濃判一〇冊、写本、中山茂純編。天正一三年（一五八五）五月から天保一四年（一八四三）閏九月に至る間の年表を上ノ部・御連枝御家老諸士諸役・制令御普請金銀・雑事の四項目に分けて記している。奥書の末尾に「嘉永四亥年十二月中山茂純謹言」とある。

●「阿淡藩翰譜」 美濃判一二冊、写本、中山義純輯。天正一二年（一五八四）から天保五年（一八三四）に至る二五〇年間の家老以下鉄砲組に至る藩士の公的記録。凡例の末尾に「弘化四年秋 中山義純輯」とある。

●「勝間記」 美濃判一冊、写本、吉井直道著。大阪夏の陣における蜂須賀藩の勲功を記し、巻末に「文政庚寅年の中秋 吉井永蔵藤原直道」とある。

●「率田編」 奉書判一冊、写本、万延元年（一八六〇）青山又左衛門編。蜂須賀家の系図ならびに花押の集成。以

上の史料は、蜂須賀家旧蔵本である。

●「阿波藩御記録」一冊、写本、宝曆十一年(一七六一)。天和三年(一六八三)四月より寛永八年(一七一)三月に至るまでの藩史。

「松平阿波守様御系図並御感状」「御系譜考証」「蜂須賀氏系譜」「御系譜草稿」「御系譜下書」「蜂須賀畧系譜」。これらの史料は、後藤氏が蜂須賀家の系図の研究のために収集されたものである。蜂須賀家は歴代和歌をよくし、歌集を多く残しており、文庫は「光隆様御詠歌御自作中院通茂」「後水尾院勅点詠草」「興源院公御筆」「木葉集」「うたあわせ」(齊裕公)「ひかことの記」等々、多数所蔵している。また「手鑑」(延宝三年)におさめられている飯尾常房自筆の短冊をはじめ、常房に関する史料の所蔵もある。常房について後藤氏は、先年郷土史談第六編として「飯尾常房考」を発表しておられるので参照されたい。なお後藤氏は、阿波の歌人史編纂の希望を持っておられ、阿波にゆかりのある歌人の文献収集につとめておられる。

## — その他 —

凌霄文庫には、後藤家家伝の二稀書として司馬江漢著「独笑妄言」(写本)および「俳諧言之羽織」巻第二夏を所蔵している。前者は、中井宗太郎著「司馬江漢」にも記されており、後者は俳諧大辞典所載の言羽織の項には、

原本伝存未詳とある。この他「荒木村重伝」や「十七瀬の水泡」等、染色や阿波関係以外にも貴重なものが少くはない。

郷土史談第七編「探墓掃苔録」には、柳田国男・三田村鳶魚・森銚三・福本日南・藤浪剛一の著書の凌霄文庫所蔵目録が、同第八編「阿波の十郎兵衛」には、著者署名本の所蔵目録が収録されている。

三木文庫、凌霄文庫はともに後藤氏の著述によって、よくその存在が知られている。三木文庫見学後大阪にわたり、厳冬の一月およそ八時間にわたり、国書にうとい私に赤子の手をとるように説明してくださったのであるが、結局すべて後藤氏の著述からの孫引きに終わってしまったようである。もし本文に誤りがあるとすれば、それはすべて私の責任である。後藤氏にじかに接し、その限らない本への愛着と情熱、そして厳密な文献の考証は、一図書館人として頭の下がる思いであった。

最後になってしまったが、今回の見学に際し、三木文庫の三木与吉郎氏、杉内武夫氏、凌霄文庫の後藤捷一氏には、並々ならぬ御配慮をうけた。ここに改めて感謝する次第である。

(むらやま・たかお 科学技術課)